

探訪 北の風景 114

日本最大のクビナガリュウ 上川管内中川町

青木和弘

中川町は、北海道の上川管内最北部に位置し、人口は1296人（2023年8月末現在）。町の86%を森林が占め、かつては林業も盛んだったが、現在は畑作と酪農が基幹産業だ。明治期からアンモナイトの化石が発掘され、近年は日本最大のクビナガリュウの発見もあり、「町そのものを博物館」とみなしたマチづくりが進められている。

話は一気に地質時代までさかのぼるが、中川町には蝦夷層群という白亜紀後期（1億500万から6600万年前）の海の地層が広く分布している。北海道の襟裳岬から宗谷岬まで南北に縦断して広がっていて、この地層が川で削られることでアンモナイトやナカガワニシン、エゾダイオウイカなど海の生物化石が出てくる。ここは国内屈指の白亜紀海生生物の化石産地なのだ。



そこで、ぜひ訪れてほしいのが「中川町エコミュージアムセンター」である。役場などがある市街地から10キロほど南にあり、1999年に廃校の佐久中学校の建物を改修した施設だ。体育館が自然史博物館になり、教室などが宿泊型体験研修施設になった。

1991年に発見されたクビナガリュウは7200万年前の化石で、推定復元像が11メートルという国内最大のもの。2000年に発見した恐竜テリジノサウルスのツメの化石は8300万年前のものだ。気が遠くなるほど昔のことだが、こうして地球のダイナミックな地殻運動や気象変動、生物の進化や種の絶滅など、延々と続く、自然界の変転の証拠を、じかに見る事ができる場所だ。想像図に描かれているような生物が泳いでいた太古の海を想像するだけでも面白い。

ここには中川町で採集したアンモナイトなど多種多様な化石が展示されている。アンモナイトは渦巻き状の殻を持ったイカやタコのような軟体生物で、足は10本以下ではないかと説明パネルに書いてあった。でも、アンモナイトは進化することで、なぜかあの殻の渦がほどこけてヒモ状になっていったというから不思議である。

この博物館では地道な研究が行われていて、大学も研修でよく利用し、世界各地の研究者も訪れる。化石の現物を見ながら解説を聞いたり説明を読んだりすれば、それほど知識がなくても、十分楽しむことができる。現に、近郊の小中学校や高校が宿泊研修によく利用している。



中川町内で多種多様なアンモナイトが出土する。渦巻き状の殻を持つ軟体生物で、写真上部のようなイメージだと考えられているが、実際には足が何本あったのかも確証は得られていない。長い年月を経て渦巻き状からひも状へ進化したという

ここで中川町の歴史をたどってみよう。中川町には旧石器時代から人々の暮らしがあった。その後、縄文（1万3000年〜7世紀）、擦文（7〜13世紀）、そして煮炊きにも鉄器を使うアイヌ文化期へとつながる。1857年（安政4）年、松浦武四郎が天塩川からこの地域を探検し、現在の天塩中川駅から北に2キロほどにあるペンケナイ川の辺りで宿営して、「天塩日誌」に当時のアイヌ民族の暮らしなどを記している。

和人による本格的な開拓が始まるのは、1903（明治36）年、入植者に中川御料地（現中川町と音威子府村）の貸し付けが始まってからである。当時、内陸への輸送手段は天塩川をさかのぼる川舟だけで、1900（明治33）年に天塩から中川まで長門丸が就航していた。

原始林から切り出した木材は、町を流れる天塩



自然史博物館の恐竜のテリジノサウルスの骨格。この上に巨大なクビナガリユウがかぶさるように展示されている。中川町は化石を活用した地域活性化を目指している。その中心施設がこのエコミュージアムセンターだ



旧佐久中学校の校舎を改修してつくられたエコミュージアムセンター。自然史博物館と宿泊研修施設がある

宿泊研修施設へ向かう廊下に旧佐久中学校の校旗や賞状、卒業生の制作物などが展示保存されている

川の、融雪期の増水を利用して天塩港へ流送し、アカエゾマツは「世界に冠たる天塩松」と評価が高くヨーロッパや中国などへも輸出された。

1922（大正11）年、宗谷本線普平（ばんぺい）駅（現天塩中川駅）が開業して物資の輸送は鉄道に代わる。天塩川の対岸にあった郵便局や役場も鉄道駅の近くに移転し、いまの市街が形成された。あまり知られていないが、明治から大正にかけて薄荷（ハッカ）の栽培が盛んで、天塩川流域で一番の生産地だった。歌人の斎藤茂吉が1932（昭和7）年、医師の兄・守谷富太郎を訪ねて中川を訪れ、57首の短歌を残している。その中に薄荷にちなんだものもある。「ふもとまであをををしたる薄荷畑のうえにいつしかも白雲の見ゆ」。兄の診療所兼住宅の跡地が「茂吉小公園」になっている。また、自然史博物館には、石器や土器、薄荷の分離装置や、茂吉コーナーの展示もある。